

38

唾液腺腫瘍における ^{67}Ga の集積程度と $^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ による唾液腺機能検査を併用した複合診断
外山三智雄、羽山和秀、前多一雄（日歯大新潟放）

唾液腺腫瘍は病理組織像が多彩で、biopsyが禁忌であるため、術前の画像診断の意義は大きい。唾液腺腫瘍の良性、悪性の鑑別診断としては、 ^{67}Ga を用いた腫瘍シンチグラフィと $^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ を用いた唾液腺シンチグラフィを組み合わせた診断法が有効とされてきたが、 ^{67}Ga 陽性の良性腫瘍が存在することからその診断能には限界があった。我々はこれまで、上顎洞炎と上顎洞癌との鑑別診断に ^{67}Ga 集積程度の評価が有効であり、 $^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ による動態解析から疾患が異なると time activity curve のパターンに違いがあることを経験してきた。そこで今回は、唾液腺腫瘍の良性、悪性の鑑別診断を目的として、 ^{67}Ga の集積程度と $^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ による唾液腺機能検査を併用した複合診断について retrospective に検討したので報告する。

39

甲状腺原発非ホジキンリンパ腫における ^{67}Ga シンチグラフィ
高橋正嗣、松井律夫、上杉康夫、結城雅子、辰巳智章、足立 至、清水雅史、河合 武、末吉公三、檜林 勇（大阪医大放）

20例のⅠ期またはⅡ期甲状腺原発非ホジキンリンパ腫について治療前後の ^{67}Ga シンチグラフィを検討し、CTと比較した。治療前の ^{67}Ga シンチグラフィの陽性率は85%で、びまん性大細胞型、中細胞型にて比較的高率に集積した。3cm以上の症例は3cm未満のものより集積率は高かった。 ^{67}Ga シンチグラフィはCTより早期の病期と判定する傾向にあった。治療後、 ^{67}Ga シンチグラフィにて集積を認めた症例は無く、CTでは7例がPRと判定された。7例中3例で腹部に再発を来し、 ^{67}Ga シンチグラフィでは再発部位に集積を認めた。以上より、甲状腺原発非ホジキンリンパ腫における ^{67}Ga シンチグラフィは有用な検査となり得た。

40

肺癌化学放射線療法中の間質性肺炎検出に於けるガリウムシンチグラフィと高分解能CTの有用性
東北大・加齢研・機能画像 小野修一、吉岡清郎、高橋寿太郎、赤井澤隆、井上健太郎、M・B・イムラン、福田 寛 仙台厚生病院・放 山田健嗣

肺癌の化学放射線療法中間質性肺炎の検出に対するガリウムシンチグラフィと高分解能CTの有用性を検討した。対象は、治療中に間質性肺炎を発症した小細胞癌3例、非小細胞肺癌3例である。3例は、放射線化学併用療法、3例は放射線単独であった。全例で照射野外に迄広がる間質性肺炎が見られた。これにガリウムシンチグラフィと高分解能CTを経時的に撮像し、他検査所見や臨床症状と対比検討した。ガリウムシンチグラフィは間質性肺炎の発症の検出や存在範囲の検討と経過観察、高分解能CTは炎症の性状の把握に有用であり、経時的な撮像は意義があるものと思われた。

41

間質性肺炎のGa-67 SPECTの臨床的検討

上野恭一（石川県立中央 放）、西 耕一、橘 秀樹、水口雅之（同 呼内）

Ga-67は、間質性肺炎の活動性の診断に用いられるが、胸部SPECTの報告はほとんどない。そこでSPECTにより新しい診断情報が得られるかどうか検討した。

対象は間質性肺炎の疑われた25例（サルコイドーシス4例を含む）。Ga-67 74MBq 静注後48hr後にGCA901でGa-67スキャンを、Multi SPECT3でSPECTを各々撮影した。

Ga-67スキャンまたはSPECTで、肺野の異常集積（活動性）ありと診断されたのは25例中10例で、うち8例は両者とも診断可能であった。しかし、SPECTの方が局在が明確で、CTとの直接対比が可能で、胸膜病変との鑑別も可能であった。しかし、軽度の瀰漫性集積の2例では、SPECTでは診断が困難であった。またサルコイドーシスの肺門、縦隔リンパ節腫大の診断はSPECTの方が有利であった。

42

サルコイドーシスにおけるGaシンチグラフィの有用性について

太田正志、松野典代、久山順平、宇野公一（千葉大放科）
内田佳孝、北原宏（千葉大放部）

未治療のサルコイドーシス患者51例においてGaシンチグラフィの病変検出能及び集積程度と活動性・予後との関連について検討した。 ^{67}Ga -citrate 74MBq 静注72時間後に頭部～骨盤部のスポット像を撮像し、肺門、肺野、縦隔、皮膚、ブドウ膜/涙腺、心臓、表在リンパ節についてGaシンチグラフィの感度・特異度及び集積程度と血中ACE値、BAL所見及び予後との関係を検討した。肺野、ブドウ膜/涙腺、縦隔病変に対しては高い感度、特異度を示したが、皮膚病変への集積を示した例はなかった。集積程度と活動性については血中ACE値との相関は認められたものの、BALの所見とは有意な相関は認められなかった。集積程度と予後との間にも有意な関係は認められなかった。

43

新しい感染／炎症イメージング剤（In-111-DTPA-IgG）の肺病変への使用経験

間島寧興、川上陸美、野上修二、丹野宗彦（都老医セ）、大石幸彦（慈恵医大）、成瀬昭二（京府医大）

高齢者、重篤患者の中に、感染／炎症の病巣部位の同定が困難な症例に遭遇することがある。最近核医学検査において、感染／炎症イメージング剤（In-111-DTPA-IgG）が開発された。この検査薬は、活動性の感染／炎症部位に、IgGが集積することにて、病巣部位のイメージングを可能とした放射性医薬品である。本検査薬を急性肺野病変（CT上に異常胸部陰影を有する）5例およびFUOで慢性肺炎性病変が疑われた5例の合計10症例に使用した。CT上炎症性異常陰影を有した4例は陽性像、CT上腫瘍性病変と鑑別が困難な症例1例は陰性像（一部分陽性像）、FUOで慢性肺炎性病変が疑われた5例は陰性像が示された。以上より、急性炎症性肺病変に関して、本検査は有用と考えられた。